

フリーガン

2006(平成18)年5月16日鑑賞(ヘラルド試写室)

★★★



監督＝レクシー・アレキサンダー／出演＝イライジャ・ウッド／チャーリー・ハナム／マーク・ウォーレン／クリア・フォーラニ／レオ・グレゴリー／テレンス・ジェイ／ジェフ・ベル／ヘンリー・グッドマン (ワイズボリシー配給／2005年アメリカ、イギリス映画／109分)

……「フリーガン」とは、サッカーの試合において集団で過激な行動を展開するサポーターのことだが、イングランドにおけるその実態がこれほどとは……？ その若者たちの「応援合戦」は、あたかもヤクザの抗争のよう……？ また、アメリカとイギリスの「違い」に大いに驚くとともに、恋愛模様抜き『ウエスト・サイド物語』として、若者たちの抗争ぶりとその悲劇をじっくりと鑑賞しよう。

フリーガンとは？ GSE とは？

私は寡聞にして「フリーガン」という言葉をきちんと知らなかったが、これはサッカー、とりわけイングランドのサッカーの世界において、集団を組んで過激な行動を展開する各チームのサポーターたちのこと。ネット情報によると、その語源は「19世紀後半にフリーガンズと自称する不良集団がイギリスで新聞記事となり広まった」他、いくつかの説があるらしい。イングランドのサッカーのクラブチームには、いずれも「ファーム」が結成されているとのことだが、GSE(グリーン・ストリート・エリート)は、ウェストハムのチームのファームのフリーガンの名前。そして、そのリーダーがピート・ダナム(チャーリー・ハナム)だ。

対抗するライバルは？

ウェストハムのチームに対抗する最大のライバルはミルウォールのチーム。当然GSEと血で血を洗う抗争をくり広げてきたのが、ミルウォールのファームで

あり、そのリーダーがトミー・ハッチャー（ジェフ・ベル）。ハッチャーは10年前にGSEとの抗争で息子を亡くしていたため、いつの日かその報復をと、GSEとの対決のチャンスを狙っていた……。

イギリスのアメリカ観は……

2003年3月のイラク開戦をめぐっては、米日とともに、当然のように米英の絆の強さが世界で際立っていた。しかし、この映画を観ると、GSEのメンバーたちのアメリカ嫌いにビックリ！ アメリカの国民的スポーツが野球であるのに対し、イギリスのそれはサッカー（もっとも彼らはサッカーとは言わず、フットボールと言うらしい）。したがって、イギリス人が「野球なんて……」とバカにするのはわかるが、この映画が描くほどフリーガンたちが反アメリカとは知らなかった……。

イギリスへやって来たヤンキーは……？

ハーバード大学の優秀な学生マット・バックナー（イライジャ・ウッド）は、同僚のジェレミー・ヴァン・ホールデン（テレンス・ジェイ）から麻薬所持の濡れ衣を着せられたことによって放校処分とされたため、傷心のままイギリスに住む姉のシャノン・ダナム（クレア・フォーラニ）を訪れた。彼女も、彼女の夫スティーヴ・ダナム（マーク・ウォーレン）もマットを温かく迎えてくれたが、その場に現れた、スティーヴの弟であるピートの「ヤンキー」に対する目は冷たく、厳しいものだった。しかし、その日はじめてピートやGSEのメンバーたちとともに「サッカー」の試合を観戦したマットは、その激しさに魅了され、次第にGSEの色に染まっていくことに……。

フリーガンはジャーナリストも大嫌い……

ヤンキーであるマットがさらにまずかったのは、彼がジャーナリスト志望だったこと。フリーガンはサッカーの試合ごとに集団で盛り上がり、応援が高じてケンカや暴力沙汰になることがザラだから、本能的に警察やマスコミが大嫌い。したがって、もしマットの父親カール・バックナー（ヘンリー・グッドマン）がジャーナリストであることや、マット自身もジャーナリスト志望だということがバレたら……？

伝説の男「メジャー」とは？

この映画のストーリーは結構ややこしい。それを説明してはこの評論が冗長になってしまうし、それが評論の目的でないことも明らか。したがって、詳しいストーリーは映画をじっくりと観てもらいたいが、ポイントとなるのは、ハッチャーの息子が死亡した当時のGSEのリーダーが伝説の男「メジャー」だったということ。そして、物語の展開の中で、この伝説の男メジャーこそが、あるきっかけでGSEを引退し、今は妻シャノンと子供のために生きているピートの兄のステイーヴだということが明らかになっていく。このステイーヴの存在がハッチャーに明らかになれば、10年前の抗争が再現されること必至。ところが、ステイーヴの予想に反してマットが次第にGSEの中にドブプリと入り込んでいく中、マットに危険が迫っていることを知ったステイーヴは遂に真相をマットに説明した。しかし、その時は既に……。

恋愛模様抜き抗争劇だが……

アメリカのニューヨークのウエストサイドを舞台にした『ウエスト・サイド物語』は、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の変形バージョンだが、この『フーリガン』はそのうちの恋愛物語の部分进行全面カットして、シャークス団VSジェット団、モンタギュー家VSキャピュレット家の「抗争」だけを、ウエストハムのファームVSミルウォールのファームの抗争として描いたようなもの……？

ストーリーが劇的な結末を迎えるためには、『ウエスト・サイド物語』におけるトニーの死亡や、『ロミオとジュリエット』におけるロミオの死亡のようなクライマックスシーンが不可欠だが、それがこの『フーリガン』では、GSEのカリスマ的リーダーであるピートの死亡。そして、その2つのファームの抗争を激化させる引き金を引くのが、ピートの信頼するGSEのメンバーであったホヴァー(レオ・グレゴリー)。このホヴァーが、いわばイエス・キリストを売ったユダのような役割を果たすわけだが、ホヴァーの心理の動きはすごく人間的で面白いもの。恋愛模様の全面カットは少し残念だが、その分、抗争劇の醍醐味をタップリと……。

2006(平成18)年5月18日記